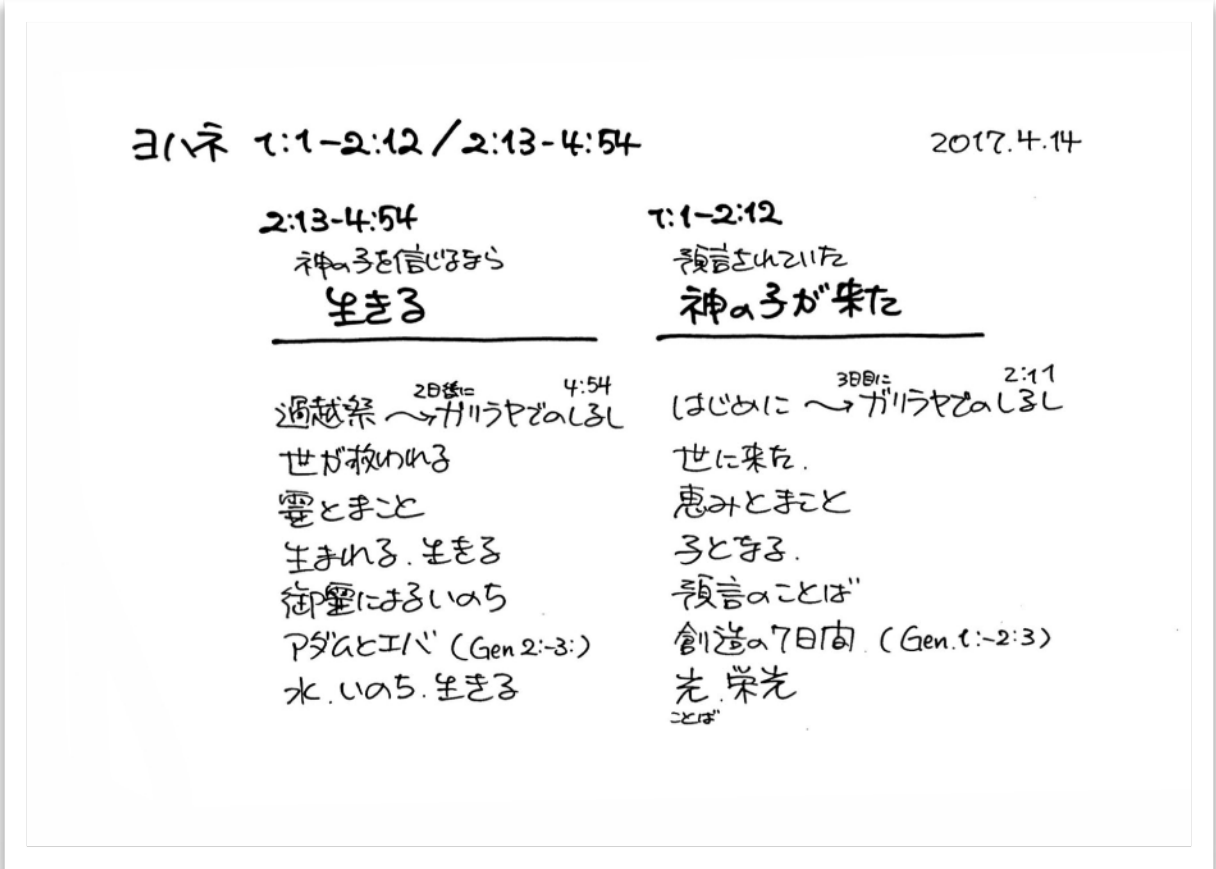
ヨハネ福音書2:13-4:54



ヨハネ福音書の2章13節から。1章からと2書の13節からが、ヨハネ福音書のストーリーのタネになっていると考えています。

2章12節までのところは、預言されていた神の子が来ました。創造の七日間ですね。「始めに」から始まって、7日目のカナでの婚礼というクライマックスで終わりますね。2章の13節から4章の54節までは、生きる御霊が与えられて、生きるということが強調されているようです。こちら(右側)創造の七日間に対して、(こちら左側は)水もありますし、生きる話、命の話がありますので、エデンの園でのアダムとエバということを連想すべき段落と考えています。こちら(右側)は光である言葉の栄光。こちら(左側)は永遠の命、生きるというものになる。これがヨハネの2つの大きなテーマになっていると思います。

こちら(左)側の生きるという段落は、最初に過ぎ越しの祭りから始まるのですね。過ぎ越しの祭りの段落があります。それで3日目によみがえるという話を最初にします。最後にガリラヤのカペナウムの役人、異邦人ですね。役人の子供が死から助かる。助かると書いていますけど、これは生きるということ。息子は生きる、死んでいたのが生きるということですので、復活する命の話で終わっている。これを第2のしるしと言って、最初の1章からのところと並行していることがわかると思います。

過ぎ越しの祭りも、今復活祭と言っているように、元々復活祭なのですね。新しく水を通って救われるということですから、復活祭。最後も復活。子が生きるということで囲われている4つの段落。これを分析するということです。3章にニコデモの話があって、新しく生まれる話ですね。それとイエスの証。神のひとり子が世に来ました。その御子を信じる者は永遠の命を得るというストーリーですね。バプテスマのヨハネの証があります。それで次に、サマリヤの女。サマリヤの女の話がここにあって、続けてサマリヤの女の話があって、食物の話、食べ物の話があります。サマリヤの女のところの話で、弟子たちは食物を買いに行きましたと言っている間の話です。帰ってきて食べ物の話をしていますので、ここはセットになって一緒の時の出来事と見ることができると思います。大きくはニコデモの話と、イエス、ヨハネの証。これはエルサレム、ユダヤの地方です。過ぎ越しの祭りもエルサレムです。ガリラヤに行く途中にサマリヤに行きます。ガリラヤ、サマリヤ。そして最後の子が生かされる。役人の息子、これは異邦人です。サマリヤ人ももちろん異邦人ですので、エルサレム、ユダヤでの証と、全世界、世が救われると言っていますから、全世界にその命の祝福が与えられて行く。行ける水が与えられるんだという事の流れで、ユダヤ人たちが新しく生まれること、全世界がその命を得ることという流れになっているのじゃないかと思います。

この中で、特に見ておくと良いということが、天から下ってきたとか、水です、霊です、色々ありますけれど、分析する時に非常に難しかったのが、このサマリヤの女の話です。サマリヤの女が「生ける水を下さい、永遠の命の生ける水があるならそれを私は欲しいです」という話があった後に、夫がいないとかいう話になって、礼拝する場所は新しい場所が与えられますよという話でつながっていくのですけど、よくこのつながりがわかりませんでした。それにはこの箇所自体にヒントがあるということですね。このヤコブの井戸。わざわざヤコブの井戸で、「あなたはヤコブよりも偉大なんですか」と言っているのですね。このヤコブの井戸のストーリーを思い出さないとここで言われてることがわからないのだろうということですね。創世記の29章にヤコブの井戸の話があります。それはラケルが出てきて、ラバンの所に行く時に、ラケルに会ってそこで水を飲ませるという話です。ここの箇所のちょうど前のところに、はしごが天に届く、それを見てここを「ベテル」と呼ぶ箇所がありますね。これがヨハネ1章のナタナエルのところです。ナタナエルのところで、「あなたがたに言っておく、天が開けて御使いたちが人の子の上に上り下りするのを見るであろう」と。これがヤコブのはしごの話です。ヤコブのはしごの話が1章からの段落にあって、その後のところで、このラケルの井戸、ヤコブの井戸の話が続いていく。創世記、その箇所を思い出さざるを得ない言い方になっています。例えば「時は昼の12時頃であった」これは何でしょうということなんですけど、こういう箇所を見ると29章7節「ご覧なさい。日はまだ高いし、群れを集める時間でもありませんから、羊に水を飲ませて、また行って群れをお飼いなさい」とヤコブがラケルに言うのですね。「日はまだ高いし」と。「日はまだ高いし(ヨハネ4章)」こういう言い方で、ヤコブの井戸のストーリーが成就していますよと一緒に見てくださいねということが分かると思います。「イエスは旅の疲れを覚えて」と。「ヤコブは旅を続けて」と言って、この井戸に来るところです。そのヤコブがイエス、ラケルとサマリヤの女、ラバンとここで夫を連れて来なさいという夫と。ラケルとサマリヤの女は、何が並行してるのだろうかということなんですね。ラケルとサマリアの女は、「あなたの夫を呼びに行って連れてきなさい」というところで、「それと5人の夫があったが…」というところを見て考えると、このサマリアの女は不妊の女だったということなんであろうと思います。ルカの20章に7人の夫があったけれども、死んで、「じゃあ誰が夫なんですか。復活した時に誰が夫になるんですか」みたいな例えがありましたけど、そこで子がなくて死にましたということが言われてます。ここも、ですからこの5

人の夫が不品行で、いろんな人と結婚したというよりも、不妊だったので捨てられて、また結婚して捨てられて、また捨てられてという意味なのかなあというように思われます。不妊の女、不妊の女であるこのサマリヤの女は、泉が枯れているのです。だから産まないのです。この永遠の命に至る水、乾くことがない泉というと、子を産むことができるようになるということを暗に言われているようにも、このストーリーの中で聞こえる。そうすると、「水を下さい」と言った時に、じゃあ「夫を呼んできなさい」という話につながっていくわけですね。

泉の話は箴言5章にもあるように、女性が命を産むということを、女性の泉を泉として例えるところもありますよね。詩篇１篇を見たりすれば、「川のそばに植わってる木のようだ、その人は時が来れば実がなってとこしえに枯れることはない」ということですよね。それは千世代までに渡って、子孫が与えられるというのは、永遠の命がその女性を通して与えられているということを、子孫が代々続いていくということが、永遠の命が与えられているということと、並行して見るものなのだろうと思います。ですから、不妊の女であるサマリヤの女、異邦人ですからね。ユダヤ人じゃないですから、神様の子供を産むことができないという意味でも、不妊そのサマリヤの女が清められて、子を産むことができるようになるということを、この永遠の命に至る水の話で話しているのかなと。ただ単に長く生きるようになりますよ、天国に行きますよという話であるというよりは、子孫が千世代まで渡って与えられるという契約の祝福を受けられるようになるということを話しているんだろうと。

この「山で礼拝しました」と言っている山は、ゲリジム山ですね。ゲリジム山とエバル山が祝福の言葉と呪いの言葉を言う所です。このゲリジム山でもエルサレムでもない、新しいエルサレム。そこは霊とまことをもって礼拝する。それが新しい救いのいのちの場所なんですよと。新しい神様の民が今度生まれるということに話が展開していくんだろうと思います。神様と交わりをする場所、それはあなた方も入れる場所。霊とまことによって礼拝する場所と。永遠の命を与えられる。父とひとつになる場所が与えられますよ。それはメサイアが来る、神の国が来るということの意味ですよということで、この話が展開しているのだろうと思われますね。それでこの箇所自体が「清められ、この水がめをそこに置いたままで」と言っているのは、カナの婚礼のときにも水がめがあったのですね。カナの婚礼の時の水がめ、この清めるための水がめ。その水がめを置いたまま急いで町に行くということも、清められて結婚するということと、新しく民がキリスト、主人と結婚するということを言っている段落です。

イサクもリベカに（書き起し訂正：リベカはアブラハムのしもべに）井戸から水を飲ませます。ヤコブがラケルに水を飲ませます。モーセもチッポラに飲ませる。夫がエバに水を与えて生けるものにするということは、そんなようなつながりで、このサマリヤの女のところのストーリーが流れているんだろうというように思います。

4章で今度は食べ物の話になっています。弟子が来て食べ物と言っていますけど、これは永遠の命に至る実の話です。永遠の命に至る水と永遠の命に至る実。「労苦しなくてもその実にあずかりますよ」と言っているのは、創世記3章で「労苦しないと実を結びません」と言っていた呪いが解かれてるようなそういう感じがします。こちら(4:31~42)がアダムの話を思い出す労苦しないで食物が取れるということも、この新しいの命、生きるものになるというところに含まれてるものかと思います。こういう形で創世記とのつながりを見ながら見てくると、その永遠の命というものが与えられるということは、ただ単に長く生きるということよりも、全世界にその命の祝福が広がっていくよ、創造された目的はここにあるよということが分かるようなヨハネ福音書のストーリーの出だしとなっているのだと思います。